

報告

グローバル人材を育てる英語教育の取り組み

— 立命館大学経営学部の新英語カリキュラムをめぐって —

高坂京子

要旨

立命館大学経営学部では2013年度より新英語カリキュラムを施行し、グローバル人材の育成をめざした英語教育を展開している。国際経営学科では全員が英語を集中学習（英語30単位）して高度な英語力の獲得をめざし、経営学科では英語・2言語・初修外国語の3コースからいずれかを選択し、自らの希望にそった外国語学習を進める。両学科とも1回生ではEGPのもとに英語の基礎を固めつつ国際人としての教養を培い、2回生以降はESPに移行してグローバル・アントレプレナーシップを視野に入れた専門教育へつなげていく。この新英語カリキュラムの最大の特徴は、資格試験や選択英語を有効活用して学生に明確なモチベーションを与え続けるカリキュラム構造にある。その結果、国際経営学科ではミニマム設定スコアを1回生終了時に達成する学生数が、2013年度はこれまでの3倍に急上昇した。経営学科英語コースでもスコアの大幅な上昇が見られ、改革の順調なスタートが確認できている。

キーワード

英語、外国語、カリキュラム、EGP (English for General Purposes)、ESP (English for Specific Purposes)、グローバル人材、外部試験

1 はじめに

立命館大学経営学部では、2015年度からの大阪いばらきキャンパス（OIC）での新展開を視野に入れ、グローバル・アントレプレナーシップと確かな外国語コミュニケーション能力を備えた人材の育成を目標として、2013年度より新しい英語カリキュラムをスタートさせた。このカリキュラムでは、経営学科は、英語コース、2言語コース、初修外国語コースの3つのコースのうちの一つを入学時に選択し、自らの希望にそった形で外国語学習を進めていく。国際経営学科では英語を集中的に学習し、高度な英語力の習得をめざすが、入学時に希望すれば初修外国語の履修も可能である。こうした環境を活用し、ビジネス社会で必要とされる国際的コミュニケーション能力と国際人としての豊かな教養を培う外国語教育をめざしている。

本稿の目的は、経営学部のこれまでの英語教育の到達点と課題を振り返りながら、新英語カリ

キュラムの概要と初年度における成果を明らかにし、今後の課題を考察することである。

なお、この新英語カリキュラムは経営学部として行っているものであり、学部英語専任教員全員が責任を担ってはいるが、筆者は 2011 年より経営学部外国語教育改革検討委員会の委員長として実質的なカリキュラムの立案に携わり、2013 年度の新英語カリキュラムスタート時には経営学部英語主任および BKC 英語部会長としてカリキュラムの施行に深く関わってきた関係から、本稿は筆者の文責で行うこととなった¹⁾。

2 立命館大学経営学部の英語教育におけるこれまでの到達点と課題

新英語カリキュラムについて論じる前に、そこまでに至った経緯を振り返り、経営学部英語教育におけるこれまでの到達点と課題を述べる。

2.1 経営学部における英語教育の変遷

立命館大学経営学部の英語教育を振り返ると、1992 年度に全学に先がけて英語の習熟度別クラス編成を導入し、とくにネイティブ・スピーカー教員の授業がスムーズに進むように配慮した。1993 年度にはやはり全学に先がけて学部英語副専攻を設置し、それが全学外国語副専攻の創設へとつながっていった。1998 年度にはびわこ・くさつキャンパス (BKC) への学部移転とともに経営学部の英語教育は一変し、経済学部との共通カリキュラムのもと、(i) 英語による授業展開と洋書テキストの使用、(ii) レベルごとの統一シラバスと統一教材、(iii) 日常学習の重視と平常点評価、(iv) CALL 授業の導入、(v) 1 セメ～3 セメまでの英語の集中学習、等々、当時としては斬新な英語教育を推し進めた。

2006 年度には国際経営学科が新設され、経営学科との 2 学科制を採るようになり、それに合わせて、また新たな英語教育が行われるようになった (詳細は 2.2 参照)。その結果、一定の成果が見られ、とくに低学力層に関しては、外部試験を用いた「英語ミニマム基準」を設置して卒業に必要な条件に組み込んだことから、顕著な伸びが認められるようになった。他方、いったんミニマム基準を達成した上位層、中位層では伸び悩みが問題視されるようになり、とりわけ在学期間中の留学を強く奨励している国際経営学科においては、留学に必要な TOEFL[®] の点数を獲得できない学生の問題も浮上した。

経営学部ではこれまでも毎年、英語教育に改善を重ねてきたが、2013 年度の教育改革においては 2015 年度の大阪いばらきキャンパスでの新展開を視野に入れ、大幅なカリキュラム改編を行った。国際経営学科ではインテンシブな英語教育を通して英語力を集中的に伸ばすことを目標に掲げる一方、経営学科では個人の選択と意欲を重視して学びの幅を広げ、これまでよりも多様化した教育を創意工夫することで、経営学部全体としての英語教育のさらなる充実をめざしている。

2.2 経営学部における英語教育の到達点と課題

2006 年度の教育改革以降の経営学部英語教育における目標は、(1) 専門科目との連携の強化、(2) 読む力と書く力を重視したカリキュラム設計、(3) TOEIC[®] IP 等を活用した到達度検証試

験の実施、の3点であった²⁾。それぞれの目標に関し、これまでの到達点および課題は次の通りである。

まず、(1)の「専門科目との連携の強化」については、2006年度の国際経営学科の新設以降、経営学部の新カリキュラムの大きな指針となっていた。とくに国際経営学科では必修英語内に「英語経営学入門」というブリッジ科目を設け、専門科目のなかにも多くの専門英語科目を新設して、学部専門科目への橋渡しを行った。また、必修英語の通常科目にも、両学科ともに第2セメスターからビジネス英語を導入し、教育の重点を実用や教養から「専門」へとシフトしてきた。経営学に関連する英語を学ぶことは、学生に一定の満足度を与えることができた点では成果があった。しかし、まだ専門分野の知識も英語の基礎学力も不十分な第2セメスターから専門科目と連携させた英語を導入することは時期尚早であり、語学力の向上の点では思うような結果に結びつかなかった。また、担当体制の面でも、専門科目教員と英語教員との間で責任が曖昧になりがちであった。上記の反省点を踏まえ、2013年度の英語教育改革においては専門英語の新たな導入時期と方法を取り入れることとなった。

次に(2)の「読む力と書く力を重視したカリキュラム設計」について述べると、読む力は学部英語教育がもっとも重要視してきた技能であり、リーディング科目を全科目の要と考えて力を注いできた。TOEIC[®] IPやTOEFL[®] ITPのリーディング部門のスコアの伸びを見ると、一定の教育効果が出ていることが認められる。書く力に関しても、ネイティブ・スピーカー教員が担当するコミュニケーション科目ではいずれもライティングに重点を置いたカリキュラムを組んでおり、その結果、学生は一定のまとまった文章が書けるようになった。このような成果は認められるものの、本来、ネイティブ・スピーカー教員担当の科目はスピーキングとライティングの双方の技能を高める目的の科目であるのに、2006年度の改革以降、ライティング重視の授業展開を行ってきたため、スピーキング能力を思うように養成できなかった。最近の学生のニーズはむしろスピーキングにあり、「社会で活躍できる実践的な力量の形成」という場合、話すことを最優先に考える学生が多い。また、留学をめざす学生もTOEFL[®] iBTでスピーキング能力が測定される。したがって、英語力の全体的な底上げをめざすためにも、スピーキングの能力を高める対策を講じる必要があった。

最後に、(3)の「TOEIC[®] IP等を活用した到達度検証試験の実施」についてであるが、2006年度より国際経営学科ではTOEFL[®] ITPを、経営学科ではTOEIC[®] IP等を活用した到達度検証試験を導入し、レベルごとに目標値を設定するとともに、ミニマム基準値を設け、卒業に必要な単位取得の条件としてきた。その結果、とくに下位層においてはスコアに顕著な伸びが見られた。他方、ミニマム基準達成を要卒単位に組み込むことに関しては、さまざまな問題も露見してきた。例えば、(i) ミニマム基準を達成した学生に英語力の伸び悩みが見られる、(ii) TOEFL[®]/TOEIC[®]とは関係のない英語科目をミニマム基準達成と連動させるために成績評価に整合性がない、(iii) 専任教員や嘱託講師の注意と労力がミニマム基準達成に注がれ、中位層や上位層の学生への指導が思うようにできない、などである。そこで新カリキュラムにおいては、TOEFL[®]/TOEIC[®]を学生の英語習熟度の伸長を測り、モチベーションを維持するための手段として有効に活用はするが、卒業に必要な単位には組み込まず、これまでとは異なるシステムでスコアを運用することとなった。

また、ミニマム基準を達成した学生にはこれまで留学プログラムの周知徹底などを行ってきており、その結果、2006 年度以降、経営学部では毎年 200 名前後の学生が海外派遣プログラムに参加してきた実績がある。こうした事実を踏まえ、今後は留学だけでなく、英語を使用する分野への就職を視野に入れたキャリア形成をめざしていけるよう、中位層と上位層を伸ばすカリキュラムとプログラム内容を開発する必要がある。

3 立命館大学経営学部における新英語カリキュラムの概要

以上のような背景から、これまでの到達点と課題を踏まえて 2013 年度に経営学部新英語カリキュラムはスタートした。ここでは新英語カリキュラムの指針、内容、特徴などを順を追って説明することにより、カリキュラムの全体像を示す。

3.1 新英語カリキュラムの指針

新カリキュラムにおける指針は、(1) 国際社会で活躍できる人材を育てる英語教育、(2) 多様な学生のニーズに応え、学ぶ意欲を喚起する英語教育、(3) 4 年間の継続学習の保証、という 3 点である。以下にその詳細を述べる。

まず、(1) の「国際社会で活躍できる人材を育てる英語教育」に関してであるが、今回の英語教育改革でめざしているのは、英語の 4 技能の基礎的スキルを有し、専門知識だけでなく、国際人としての幅広い教養を身につけた人材を育てる教育である。そのため、国際経営学科、経営学科ともに、1 回生の必修英語科目では EGP (English for General Purposes) に焦点をあて、スキル重視のプログラムで英語力の基礎固めをすると同時に、世界に向けて視野を広げ、英語学習のモチベーションを高めながら、国際人としての教養を培っていくことに主眼を置いている。その基盤の上で、2 回生から ESP (English for Specific Purposes) を導入し、学部専門科目への橋渡しを行う。2 回生以降で学ぶ ESP のカリキュラムには、将来、ビジネスの世界で活躍する際に役立つ EOP (English for Occupational Purposes: 職業目的の英語) と、留学や大学院進学を目的とした EAP (English for Academic Purposes: 学術目的の英語) が含まれ、各学生の目的やキャリアパスに合わせて選択できるようになっている。このように、「実用」と「教養」と「専門」のバランスがとれた英語教育を行うことにより、「ビジネス社会で必要とされる国際的コミュニケーション能力」(学部のディプロマ・ポリシー) を有するグローバルな人材の養成をめざし、学部の掲げる「グローバル・アントレプレナーシップ教育」へとつなげていく。その概観は図 1 の通りである。

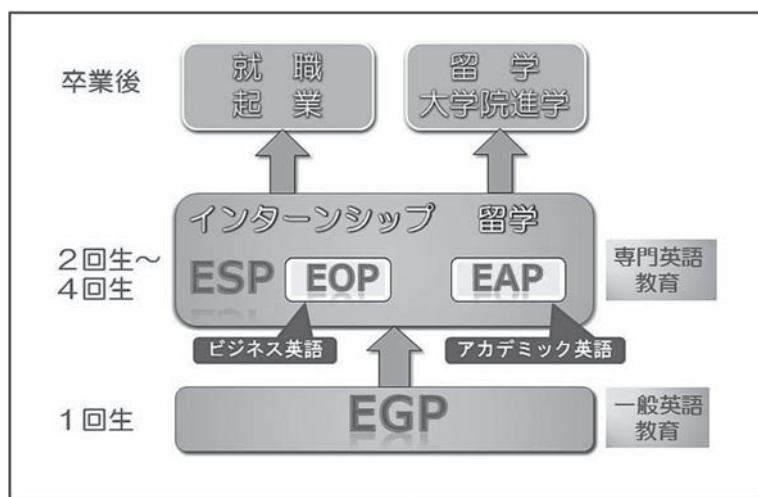


図1 経営学部の英語教育概観

次に(2)の「多様な学生のニーズに応え、学ぶ意欲を喚起する英語教育」について述べよう。経営学部では英語力の高い層から低い層まで多様な学生が混在しており、その学力差はTOEIC[®] IPやTOEFL[®] ITPの団体受験結果からも顕著である。ゆえに、個々の学生の英語習熟度や将来の目標によって、授業に求めるものも大きく異なる。こうした多様な学生に対応するため、経営学部では先に述べたように1992年度より英語クラスの習熟度別編成を行ってきた。しかし、社会の変遷にともなってさらに多様化する学生たちのニーズに応え、学びの意欲を喚起する英語教育を行うため、新英語カリキュラムにおいては、2回生以上の学生を対象に「選択英語」として特色あるcontent-basedな科目群を設けて、一定の英語力に達した学生が自らの意思で選べるようにしている。また、英語資格試験のスコアアップを視野に入れた授業を設け、学生たちの留学や就職の夢が実現できるような教育支援も行っている。

(3)の「4年間の継続学習の保証」に関しては、2回生まで集中的に英語を学習しても3回生以降に英語に触れる機会がないため、培ってきた英語力が低下するという現象がこれまで指摘されてきており、学生側からも「上回生でも英語を学習する機会がほしい」という要望が聞かれた。そのため、選択英語やプロジェクト英語(国際経営学科)などを3回生~4回生に配置し、より専門性の高い英語を習得できるようにするとともに、英語で行われる専門科目へと橋渡しをしていくことにより、4年間の継続学習の機会を保証するようにした。それにより、学部がめざすグローバル・アントレプレナーシップと確かな外国語コミュニケーション能力をもった人材の育成につなげていくことをめざしている。

ただし、こうしたプログラムの恩恵をフルに享受するためには、一定の英語力の基準を超えていなければならない。それが新英語カリキュラムの大きな特徴でもある。その「ミニマム基準」として設定されているのが、TOEIC[®] 550点/TOEFL[®] 480点である。とくに国際経営学科ではこの基準を達成しているかどうかでカリキュラム構成が4パターンに分かれる。以下に詳細を見ていこう。

3.2 新英語カリキュラムの構成と特徴

経営学部には国際経営学科と経営学科があるが、新カリキュラムにおける両学科の外国語履修形態は表1の通りである。

表1 経営学部の外国語履修形態

学科	必修	任意
国際経営学科	全員が英語コース（英語 30 単位）	初修外国語（6 単位） （選択英語・・・必修の 8 単位を超えた分）
経営学科	入学時に以下の 3 コースより 1 つを選択 ① 英語コース（英語 12 単位） ② 2 言語コース（英語 6 単位 + 初修外国語 6 単位） ③ 初修外国語コース（初修外国語 12 単位）	選択英語

新英語カリキュラムは必修英語科目の総単位数が多い国際経営学科をベースとしてデザインし、それに準拠する形で経営学科のカリキュラムも作られている。したがって、以下では国際経営学科の新カリキュラムを中心に説明しながら、適宜、経営学科の説明を加えていくことにする。

新英語カリキュラムの特徴を筆者なりにまとめると、(1) 読む・聞く・話す・書くの4技能のバランスのよい習得、(2) EGP と ESP を織り混ぜた教育、(3) 学生の動機づけへの外部試験の有効活用、(4) 明確な到達目標とそれによって異なる履修パターン、の4点に集約できるであろう。

(1) の「読む・聞く・話す・書くの4技能のバランスのよい習得」に関しては、例えば、国際経営学科は1回生に4技能のそれぞれを伸ばすことに特化した「英語 R (Reading)」、「英語 L (Listening)」、「英語 S (Speaking)」、「英語 W (Writing)」というクラスを置いている。「英語 R」と「英語 L」は読む・聞くという受信能力を高め、英語の基礎力を築く目的のクラスである。使用する教材はすべて洋書であり、留学を視野に入れて、海外の大学のレクチャーを聞きとる内容の教材なども取り入れている。「英語 S」と「英語 W」はネイティブ・スピーカー教員担当のハーフサイズのクラスであり、ディスカッション、プレゼンテーション、エッセイなどを通じ、話す・書くという英語の発信能力を高めていく。経営学科においては必修英語科目の単位数の制約から、4技能すべてのクラスを置くことはできないので、1回生は英語コース・2言語コースともに「英語 R (Reading)」と「英語 SW (Speaking + Writing)」を受講することになっている。また、国際経営学科および経営学科英語コースにおいては1回生時に「英語 CALL」を設け、オンライン学習を通して4技能のさらなる強化をはかるとともに、世界遺産を扱った DVD 教材などを用いて世界への興味・関心を培うことにより、英語学習への動機づけを行っている。

(2) の「EGP と ESP を織り混ぜた教育」に関しては、すでに述べたように、新英語カリキュラムにおいては1回生時に EGP を集中的に学び、英語の基礎力と一般教養の知識を高めた後、2回生以降に ESP として経営学に関連した英語を学んでいく。例えば、まず国際経営学科について述べると、2回生時には全員が「Business English A」、「Business English B」、「英語経営学入門」を履修することになっている。「Business English A」では *The Economist* など扱った教材を中

心にビジネス関係の基本的な語彙を修得しながら、ビジネスに関連した英語を読んだり聞いたりできるようになることをめざす。「Business English B」では、ネイティブ・スピーカー教員の指導のもと、ビジネス場面に関連するさまざまなトピックについて英語で話し合えるようになるとともに、ビジネス・ライティング、ビジネス・プレゼンテーションなどにかかわる能力を身につける。また、「英語経営学入門」においては、欧米の大学で使用されている経営学の入門書を用いながら、より専門性の高いESP教育を行っている。以上3つの2回生における必修英語科目のうち、経営学科英語コースの学生は「Business English A」と「Business English B」の2つを履修し、2言語コースの学生は「Business English A」のみを履修する。また、こうした科目以外に、先ほど述べたミニマム基準を超えた学生向けの科目として、16科目から自由に選択ができる「選択英語」科目群や、必修英語の総仕上げとして専門的なプロジェクトに取り組む「プロジェクト英語」（国際経営学科のみ）がESPの2単位科目として設けられている。

次に（3）の「学生の動機づけへの外部試験の有効活用」に関してであるが、本カリキュラムでは、TOEFL[®]、TOEIC[®]などの外部の英語資格試験を効果的に利用して学生の動機づけを行う点が大きな特徴となっている。その方法として、(i) 特定の科目の成績評価に外部試験のスコアを反映させる、(ii) スコアのミニマム基準を達成したかどうかで履修パターンを差別化する、という2つを採用している。(i) の点に関しては表2に、(ii) に関しては表3に詳細を記載する。

表2 外部試験スコアを成績評価に反映させる科目

学科・コース	科目	成績評価へのスコアの反映方法
国際経営学科	留学英語演習	平常点評価 50%、スコア 50%
経営学科・英語コース	資格英語演習 A	平常点評価 50%、スコア 50%
経営学科・2言語コース	英語 R	レベル別（Upper-Intermediate、Intermediate、Pre-Intermediate）に定めた基準スコアの上限を超えると5%加点、下限を下回ると5%減点、不受験は10%減点。

表3 ミニマム基準（TOEFL[®] 480点、TOEIC[®] 550点）達成を必要とする科目

		ミニマム基準達成（2単位科目）	未達成者の代替科目（1単位科目）
国際経営学科	2回生以降	選択英語科目群（4科目）	Step-up English 1～4、および資格英語演習 B1～4（合計8科目）
	3回生	プロジェクト英語（1科目）	英語実習 A・B（2科目）
経営学科	2回生以降	選択英語科目群 [任意履修]	

上記の「留学英語演習」（国際経営学科）においては留学を視野に入れてTOEFL[®]を活用した授業を、「資格英語演習」では将来の就職に備えてTOEIC[®]を取り入れた授業を展開している。こうした指導を積極的に行うことを通して留学や就職に役立つ英語力の基盤を形成し、国際社会で活躍できる人材を育てる英語教育、そしてグローバル・アントレプレナーを育成する学部教育につなげていく。これらの科目では、ミニマム基準値を超えるか否かではなく、実際に各自が取ったTOEFL[®]／TOEIC[®]の得点そのものを成績評価に組み込み、授業と本試験の両方を大切

にしながら、どのレベルの学生も英語力の伸長に向けて真剣に取り組めるような仕組みとしている。ただし、経営学科2言語コースでは単位数の関係から「資格英語演習」を置くことができないため、2014年度からは「英語R」を活用し、レベル別クラス編成の各レベルに望まれるスコアの上限と下限を設けて、上限を上回ると加点、下限を下回ると減点という形で学生にモチベーションを与える工夫を始めた。こうした資格試験は学生たちにとっても明確な到達目標を示してくれるので、有効に活用することによって学生の集中学習を促すことができ、学生側のニーズにも応えていると言える。

最後の特徴(4)の「明確な到達目標とそれによって異なる履修パターン」[上述の(ii)に相当]については、主に国際経営学科に適用されるものであるが、表3に示したように、ミニマム基準を達成しなければ履修できない科目を2回生と3回生のそれぞれに設け、「選択英語」科目群を履修するには1回生時に、「プロジェクト英語」を履修するには2回生時にミニマム基準を達成することを履修の条件とした。そして、たとえ1回生で一度基準を達成して2回生以降に「選択英語」科目群の履修が認められたとしても、2回生時にもう一度基準を達成しなければ3回生時に「プロジェクト英語」の履修が認められないというカリキュラム構造になっている。すなわち、国際経営学科の学生は2つのハードルを越えることが求められるわけである(図2参照)。このようにハードル(=ミニマム基準達成)を2段階設けることにより、一度ハードルを越えてしまった学生たちの学習意欲を持続させることが可能となるものとする。

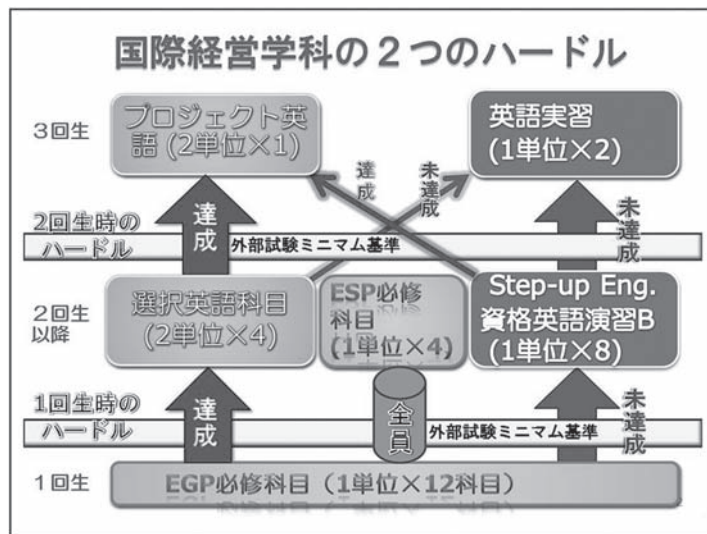
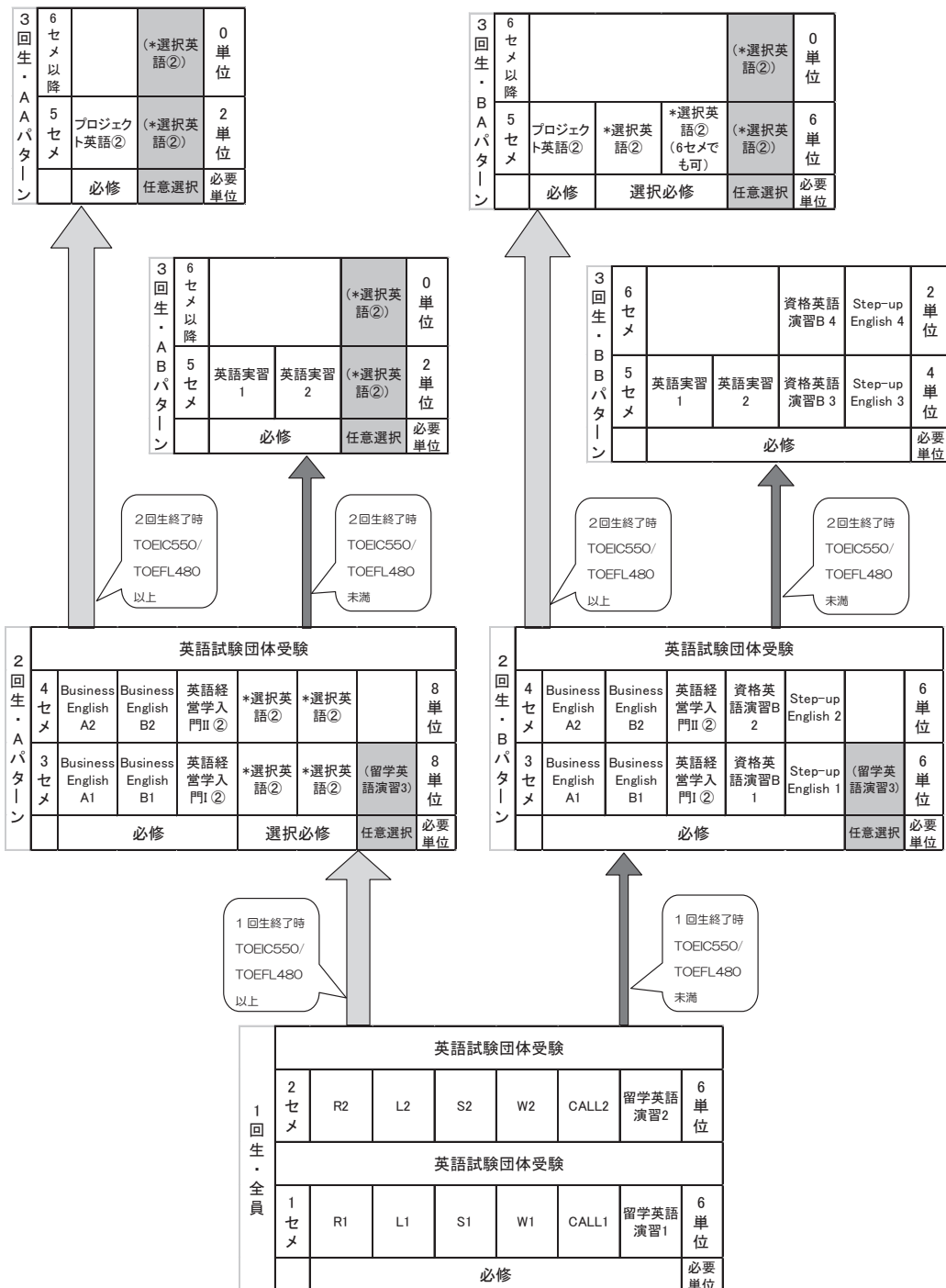


図2 国際経営学科の履修パターン概観

こうしたカリキュラム構造においては、それぞれの段階でハードルを越えたか否か、つまりミニマム基準を達成したか否かで、「達成→達成」(AAパターン)、「達成→未達成」(ABパターン)、「未達成→達成」(BAパターン)、「未達成→未達成」(BBパターン)という4つの履修パターンが存在する。すなわち、国際経営学科では4通りの履修パターンを想定したカリキュラムを設け

ることになるわけである。詳細は表4を参照されたい。

表4 国際経営学科の4つの履修パターン（英語30単位）



また、経営学科の履修パターンは国際経営学科のように複雑ではないが、参考までに挙げておく。英語コースは表 5、2 言語コースは表 6 の通りである³⁾。

表 5 経営学科 英語コースの履修パターン (英語 12 単位)

1 回生				2 回生				3~4 回生
1 セメ		2 セメ		対象	3 セメ	4 セメ	5~8 セメ	
R1	英語試験 団体受験	R2	英語試験 団体受験	全員	Business English A1	Business English A2		
SW1		SW2			Business English B1	Business English B2		
CALL1		CALL2		ミニマム 基準 達成者 [任意]	(選択英語)	(選択英語)	(選択英語)	
資格英語 演習 A1		資格英語 演習 A2						

表 6 経営学科 2 言語コースの履修パターン (英語 6 単位)

1 回生				2 回生				3~4 回生
1 セメ		2 セメ		対象	3 セメ	4 セメ	5~8 セメ	
R1	英語試験 団体受験	R2	英語試験 団体受験	全員	Business English A1	Business English A2		
SW1		SW2		ミニマム 基準 達成者 [任意]	(選択英語)	(選択英語)		(選択英語)

4 新英語カリキュラムにおけるこれまでの成果

以上、経営学部の新英語カリキュラムの内容と特徴を述べてきたが、ここで新英語カリキュラムが施行された 2013 年度の外部試験団体受験の結果を中心に、初年度の到達状況を見ていこう。学生の英語学習へのモチベーションを高めるカリキュラム構築を意図し、2013 年度からは、1 回生は従来の 6 月に加えて 11 月・12 月にも全員が外部試験を受けるように設定している。そうした過程における成果を評価すべく、2013 年度の団体受験結果を分析する。なお、分析は詳細なスコアデータに基づいて行っているが、ここで具体的な数字を公表することは差し控えたい。

4.1 国際経営学科の 2013 年における外部試験団体受験の結果

まず国際経営学科の結果から見ていこう。2013 年度の国際経営学科 1 回生は、4 月の入学時にクラス編成のために TOEIC[®] Bridge を受験し、その後、6 月と 11 月に TOEFL[®] ITP を団体受験した。TOEFL[®] ITP の受験者数は 164 名で、受験率 99.4%であった。国際経営学科 1 回生 (2013 年度入学生) と 2 回生 (2012 年度入学生) の TOEFL[®] ITP 団体受験における平均点の推移は、次の表 7 の通りである。

表7 国際経営学科における TOEFL® ITP 団体受験平均点の推移

	1 回生時			2 回生時
	4 月 TOEIC® Bridge 入学時	6 月 TOEFL® ITP 入学後 2.5 ヶ月	11 月 TOEFL® ITP 入学後 7 ヶ月	6 月 TOEFL® ITP 入学後 14.5 ヶ月
2012 年度 入学生	TOEIC® Bridge ⇒ 0 点設定 [171 名] TOEIC 換算 ⇒ 0 点設定	TOEFL® ITP ⇒ 0 点設定 [146 名] TOEIC 換算 - 15.5 点	N/A (団体受験なし)	TOEFL® ITP + 6.5 点 [112 名] TOEIC 換算 + 4.1 点
2013 年度 入学生	TOEIC® Bridge - 1.2 点 [176 名] TOEIC 換算 ± 0 点	TOEFL® ITP + 14.6 点 [164 名] TOEIC 換算 + 27.4 点	TOEFL® ITP + 20.5 点 [164 名] TOEIC 換算 + 44.4 点	N/A (団体受験なし)

注：[] = 受験者数

表7は、国際経営学科2012年度入学生の入学時における TOEIC® Bridge の平均点とその TOEIC 換算値、および6月における TOEFL® ITP 団体受験の平均点をそれぞれ0点と設定した場合、同種の試験スコアにおいてどのような点数の増減が見られたかを示したものである。2012年度入学生と2013年度入学生を比較すると、4月初めの TOEIC® Bridge においてはほとんど有意差が見られなかったにもかかわらず、6月中旬の TOEFL® ITP では2013年度入学生のほうがすでに平均点が14.6点高くなっており、11月下旬には6月時より平均点がさらに5.9点（TOEIC換算：16.9点）上昇した。2013年度入学生の1回生時11月の団体受験のスコア（入学後7ヶ月）は、2012年度入学生の2回生時6月の団体受験のスコア（入学後14.5ヶ月）と比べても、14.0点（TOEIC換算：40.3点）の平均点の上昇が見られる。新英語カリキュラムでは、国際経営学科の1回生は週6コマの英語授業を受講し、11月受験時までに2セメスターで12コマの授業を履修している。他方、旧カリキュラムの2回生は6月受験までに週4コマの授業を3セメスター受講しており、やはり合計で12コマの授業を履修していることになる。同じコマ数の英語授業を受講したにもかかわらず、これだけの違いが見られるのは、改革後のカリキュラム内容と学生への動機づけが有効に機能していることを示唆していると考えられる。なかでも、新英語カリキュラムにおいて、主として次の4点を実施したことの成果であろう。

- (i) 1回生の授業をこれまでの週4コマから週6コマに増やした。
- (ii) 「英語S」・「英語W」というネイティブ・スピーカー担当のハーフサイズのクラスを設定し、英語力を4技能の面から総合的に強化するカリキュラムに改編した。
- (iii) 「留学英語演習」という必修英語科目を新設し、TOEFL®を視野に入れた指導を行うとともに、評価の50%にスコアを組み込んだ。
- (iv) 2回生以上で選択必修の「選択英語」科目群（2単位×4科目が必修）を履修するためには、従来の英語ミニマム基準としていた TOEFL® 480点（TOEIC® 550点）を1回生時に達成しなければならず、達成できない場合には1単位の英語科目を代替受講するシステムを構築した。

次の図3は、2013年度入学生の1回生時6月と11月の団体受験における点数区分ごとの人数と比率を示したものである。TOEFL® 480点未満の層が減少し、480点以上の層が増加していることが分かる⁴⁾。

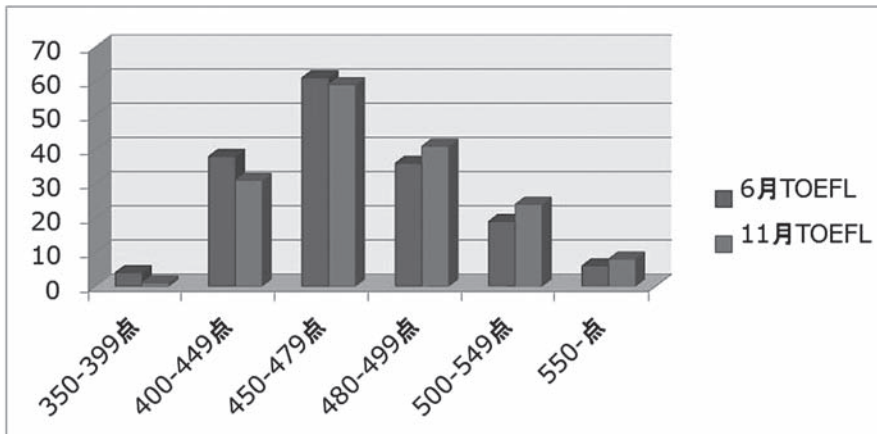


図3 国際経営学科 2013 年度 1 回生の TOEFL® ITP 点数区分別人数の推移

また、新英語カリキュラムにおいては、すでに述べたように、国際経営学科では TOEFL® 480 点 / TOEIC® 550 点を一つの基準とし、1 回生時にそれを達成するか否かで 2 回生以降の履修科目が異なる。そうした体制づくりがうまく機能し、2013 年度の 1 回生は 2013 年 11 月時点で基準達成者 69.9%、未達成者 30.1% となった。2012 年度の 1 回生はこの時期に基準達成者 23.7%、未達成者 76.3% だったので、2013 年度はその達成率を 3 倍近く (2.9 倍) 上回っており、めざましい進歩と言えよう (図4 参照)。2012 年度入学生生の 2 回生 11 月時点での基準達成者が 63.9%、未達成者 36.1% なので、2013 年度 1 回生の基準達成率は、2 年間学習を積み重ねてきた 2 回生の達成率をも上回ったことになる。ミニマム基準達成率の低さに悩まされた 2012 年度までの状況が、カリキュラム改革によって予想以上に好転した。

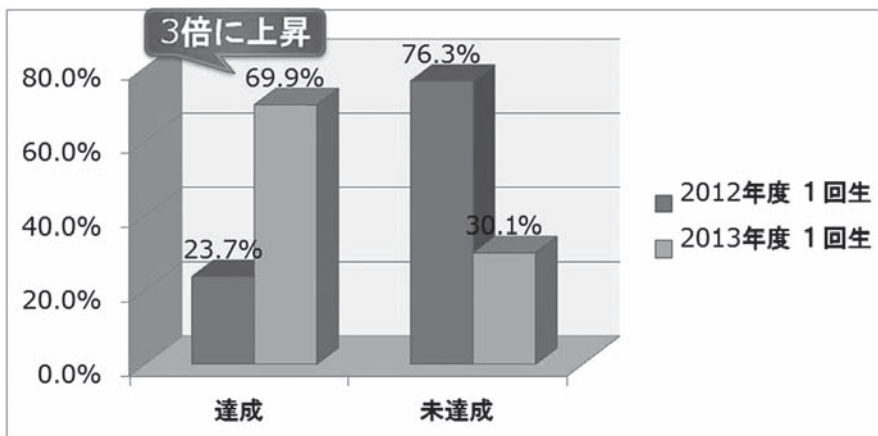


図4 1 回生終了時における 2012 年度生と 2013 年度生のミニマム基準達成率の推移

4.2 経営学科の 2013 年における外部試験団体受験の結果

次に経営学科を見ていく。2013 年度は、経営学科 1 回生は 4 月の入学時に TOEIC® Bridge を

受験した後、6月と12月の団体受験時にはTOEIC® IPを受験した。12月時の受験者数は1回生547名で受験率は94%（英語コース96.3%、2言語コース92.6%）であった。経営学科1回生の2013年度と2012年度のTOEIC® IP平均点の推移は、表8の通りである。

表8 経営学科におけるTOEIC® IP団体受験平均点の推移

		4月 TOEIC® Bridge	6月 TOEIC® IP	12月 TOEIC® IP
2012年度1回生		TOEIC® Bridge ⇒ 0点設定 [590名]	TOEIC® IP ⇒ 0点設定 [584名]	N/A (団体受験なし)
2013年度 1回生	英語コース	+1.2点	+27.0点 [215名]	+54.8点 [211名]
	2言語コース	+0.6点	-24.6点 [348名]	+7.8点 [336名]
	計	+0.8点 [607名]	-4.9点 [563名]	+25.9点 [547名]

注：[] = 受験者数

表8では、2012年度1回生における4月のTOEIC® Bridgeと6月のTOEIC® IPの団体受験の平均点を0点と設定し、同種類の試験での2013年度1回生の平均点の増減を数字で表している。TOEIC® Bridgeの平均点では有意差が見られないので、入学時にはほぼ同じレベルの学生であったことが分かる。次に6月のTOEIC® IPの団体受験結果を見ると、2012年度1回生に比べ、2013年度1回生は、英語コースにおいてはスコアの伸びが顕著であるが、2言語コースにおいては2012年度生をはるかに下回っている。また、同じ2013年度1回生で比較しても、英語コースと2言語コースでは51.6点もの平均点の開きができた。これは、主に次の2点に起因するものと思われる。

- (i) 英語コースを選んだ学生はこれまで通り週4コマの英語の授業を受講するが、2言語コースでは英語の授業が週2コマに半減した。
- (ii) 英語コースでは「資格英語演習A」を新設してTOEIC®を視野に入れた指導を行い、評価の50%にスコアを組み込んだが、2言語コースではこの科目を受講しない。

しかし、2013年度1回生の11月の団体受験では、6月時と比べ、30.8点（英語コース27.8点、2言語コース32.4点）の平均点上昇が確認でき、いずれのコースも伸びていた。それでも、両コースの平均点の差は、6月受験時51.6点、12月受験時47.0点であり、依然として大きい。4月にはほぼ同じ平均点だったことを考えると、これは英語コースの学生が2倍のコマ数の英語の授業を受け、資格英語演習等でもTOEIC®に向けた実践的な英語学習と動機づけを行っていることの成果と考えられ、ある意味、望むべき結果と言える。しかし、2言語コースの動機づけを少しでも強化できるよう、2014年度からはTOEIC® IP団体受験結果を「英語R1」・「英語R2」の成績評価に反映する方策を取り入れるようにしている（上述の表2参照）。

次の図5は、経営学科2013年度1回生の6月と11月の団体受験における点数区分ごとの人数と比率を示している。これを見ると、全体的にスコアアップしている様子が一目瞭然である。また、各点数区分の人数分布が山型ではなく、横広がりであることから、標準偏差が大きく英語力にばらつきがある点が見てとれる。今後は、人数増加の比率が高かった470点以上の層をさらに伸ばすように工夫すると同時に、まだ多くいる低得点層への対策も考えていきたい。

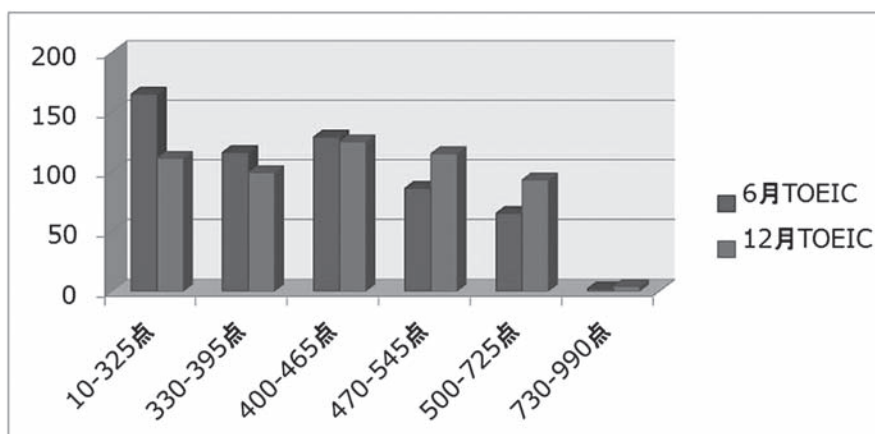


図5 経営学科2013年度1回生のTOEIC® IP点数区分別人数の推移

4.3 2013年度の外部試験団体受験を振り返って

2013年度の外部試験団体受験を振り返ると、国際経営学科および経営学科両コースのいずれにおいても平均点の顕著な上昇が見られ、改革の順調なスタートを見てとることができた。TOEFL® ITP・TOEIC® IPの団体受験をカリキュラムに効果的に組み込むことが、学生に明確な学習目標を与え、モチベーションを高めるうえできわめて有用であることを確認できたと思う。学生たちのもっているポテンシャルをもっと引き出すことができるよう、今後は団体受験をさらに有効に活用し、詳細な結果分析などを行って、英語教育の一層の充実につなげていきたい。

5 まとめと今後の課題

本稿では、2013年度にスタートした経営学部新英語カリキュラムについて、その経緯を辿るとともに、カリキュラムの概要と特徴を説明した。また、初年度の外部試験結果を分析することにより、その成果と問題点を明らかにした。なかでも、国際経営学科においてミニマム基準の達成率が一挙に3倍近く上昇したことは特筆すべき成果であったと言える⁵⁾。

新英語カリキュラムは、国際経営学科においては2段階のミニマム基準達成というハードルを有する構造になっており、学生の学習意欲を維持するには効果的なプログラムであることを今回の報告で示すことができたが、他方、外部試験の結果に応じてクラス編成を変更するなど、教員側の柔軟な対処が必須である。経営学科においても、入学時に外国語の履修コースを自由に選択するので、英語の履修を希望する学生がどれだけいるかは蓋を開けてみなければ分からない。

しかし、こうした事務的手続きの困難さを差し引いても、カリキュラム構造のなかに学生の自由な選択や明確な目標設定を組み込み、学生の学習意欲を高める仕組みをシステムとして構築することは大変重要であると考えられる。そうすることにより、教育効果をシステムとして持続可能にすることができるからである。

ただ、いくらシステムが整っても、教える側が不断の熱意を持って学生の意欲を引き出し、鼓舞しなければ、そのシステムはうまく機能しないであろう。また、教員側がどれほど努力しても、

入学してくる学生の英語習熟度が年度によって異なるので、思うような結果に導けない場合があることも想定できる。そうした際の対処法も考えていかなければならない。

経営学部の新英語カリキュラムは2年目に入り、細部を整えていくのはまだまだこれからである。学部教員全員が協力し合って、より柔軟でパワフルなカリキュラムになるよう、力を尽くしていきたい。

注

1) 本稿の一部は、2013年7月27日に立命館大学Rリエゾン高大連携・英語教育研究会において行った発表「グローバル人材を育てる英語教育をめざして～大学における取り組みと高校の授業に望むこと～」に基づいている。貴重な機会を与えてくださった立命館大学教育開発推進機構の山岡憲史教授と、会場でさまざまなコメントをくださった先生方に感謝いたします。

また、経営学部の新英語カリキュラムの詳細については、2014年度大学英語教育学会（JACET）関西支部春季大会（高坂京子・林正人・塩見佳代子「グローバル人材を育てる英語教育をめざして～立命館大学経営学部の新英語カリキュラムの概要と成果～」口頭発表、2014年6月14日、於大阪薬科大学）、およびThe JACET 53rd（2014）International Convention（高坂京子・林正人・塩見佳代子・上條武・Richard Silver「立命館大学経営学部の新カリキュラムにおける到達目標とその評価」および「立命館大学経営学部における留学生派遣プログラム」ポスター発表、2014年8月30日、於広島市立大学）においても発表を行い、その内容が本稿の一部にも反映されている。

その他、本稿の一部には、著者が2013年度経営学部英語教育改革のために執筆してきたいくつかの内部資料の内容も反映されている。

2) 「経営学部英語教育の中間総括」（立命館大学経営学部、内部資料、2008年）p.1を参照。

3) 表4～6は、筆者が『外国語学習のてびき』（立命館大学経営学部、2014年）のために作成した表をアレンジして掲載している。

4) 図3と図5のグラフの元となるデータの抽出は、立命館大学経営学部上條武准教授の協力を得た。

5) 本稿の校正中に入手した最新のTOEIC[®] IP団体試験（2014年度12月）の結果においては、2回生となったこの国際経営学科生たちの平均点は600点を超え、2006年度に学科が開設されて以来最も高い点数を記録した。

参考文献

白畑知彦・若林茂則・村野井仁『詳説 第二言語習得研究—理論から研究法まで』研究社、2010年。

白井恭弘『英語教師のための第二言語習得論入門』大修館、2012年。

**Towards English Education for Fostering Global Human Resources:
the New English Curriculum and its Outcomes at the College of Business Administration, Ritsumeikan
University**

KOSAKA Kyoko (Professor, College of Business Administration, Ritsumeikan University)

Abstract

The College of Business Administration started a new English curriculum in April 2013, with the aims of (i) cultivating students' potential so that they will be able to play an active role in the global community, (ii) motivating students by taking their diverse needs into consideration, and (iii) guaranteeing a four-year opportunity for learning English. All the students at the Department of International Business learn English intensively (30 credits), while those at the Department of Business Administration choose their language course (English, Bilingual or another foreign language course) when they enter the university. Both departments focus on EGP for the first year in order to develop students' English skills and enrich their cultural understanding to help them become global citizens, and then move on to ESP (Business English) from the second year. A striking characteristic of the curriculum is how it aims to give students a constant incentive to learn English, by utilizing external examinations and "Elective English Classes." As a result, the number of the students at the Department of International Business who gained the minimum required scores in external examinations tripled in 2013, and a score rise was also observed in the Department of Business Administration. This suggests that the new English program has had a positive effect on students in the College of Business Administration.

Keywords

English, foreign language, curriculum, EGP (English for general purposes), ESP (English for specific purposes), global human resources, external examination